

レベルの高い作品が揃った

佃典彦

新幹線で大阪に向かいながら、「今回はすんなり決まらないだろうな」って予感がありました。なかなか甲乙つけ難い。それは今回、レベルの高い作品が揃っていたためです。

『それは、満月の夜のことでした』

まるで絵本のような世界観の中で繰り広げられる一人芝居なのですが、これは厳密に言うと一人芝居ではなく、月と男の二人芝居であると感じました。〈食パン工場〉や〈パンの耳〉など言葉のセンスも素敵です。「ウソはウソを話す人の頭の中にしか真実がない」と言うセリフはまさに虚実に対する作家の意思表示の感じがしてとても惹かれました。ただやはり男は酔っ払ってない状態で月と出会いたかったなど、そこだけが残念でした。

『蛇含草ホテル』

さすが、エンターテインメントとして作品をまとめあげる力は今回の最終候補作の中でも群を抜いています。虚構と現実のバランスが良く、登場人物の多さと時間的仕掛けがあるにもかかわらず判りやすく書き上げているのは作家の現場（観客を含む）に対する責任感だと思います。数年前、一人のママ友に精神的に支配された母親が自分の子供を餓死させてしまった事件が実際にありました。僕はこの事件がサッパリ理解出来なくて、いつか誰かが演劇作品として解明してくれないかと思っていました。で、「ああ、武田さんなら！」と期待せずにはいられませんでした。

『川にはとうぜんはしがある』

ドラマとしてすごく上手いと思います。が、何度も読み返すうちに次々と疑問がわいてしまいました。まずは幾ら田舎と言っても陽子の考え方が古すぎないか？ 対立軸のため？ とか、早希が来てから（生田目も）一年間の話になっているけど実質三ヶ月くらいの感じがします。時間の飛ばし方とドラマが合っていない気がします。みまがフィリピンに行くと言明してから次のシーンが二ヶ月後、みまが旅立った後に繋がるのですが、実はこの二ヶ月間にこそ、この家族のモノガタリが秘められている気がしてなりません。

『留守』

荒野・移動遊園地・トレーラーハウス、この設定だけでもうワクワクしてしまいます。ところがドラマ自体がドキドキ進行していかない感じがします。僕が一番気になったのは外部からの姿が見えない侵入者たちの存在です。外を通る従業員・団長からの電話・外でイチャイチャしている男女とか、です。もっと二人だけの密室劇になっていても良いと思います。何が本当で何がウソで何を信じたらいいのか、二人の中で疑念が渦巻いた結果、ここから逃げるという行為に至っても良いと思いました。

『くじらのいびき』

初見読みの段階ではあまり良い印象ではありませんでした。〈短いやりとりが続いたあとに5～6行の長めのセリフ〉のパターンが登場人物みんなに見受けられて勿体無い。ユリが西瓜を取りに台所に行ったはずなのに、その間にカヨとワタルがこんな話をするのかな？ とか疑問に思う点が目についたからです。選考中、他の選考委員の皆さんの話を聞きながら納得がいく場面も幾つか見えてきました。〈悲しみを感じた時にはちゃんとアウトプットしないと死んだクジラのようにパンパンになってしまう〉〈死にたいではなくて生きたくないという感覚〉〈ユリの代わりに涙を落とすエアコン〉……意見を聞きながら僕はとても些末な部分に引っ掛かって作品の本質を見落としていたのではないかという思いに至りました。

『初心者のための永遠』

三つのエリアをいかにして有効に使うか、という試みの中で試行錯誤を経て作り上げた作品。まず僕は水槽の中で一人の俳優が〈魚群を演じる〉というセンスに驚きました。しかも少年と入れ替わってしまい、彼は永遠を感じ取る。電車ホームのエリアの使い方も面白いと思いました。乗客の頭の中でドンドン増幅していく何かを思考している人々の姿は映画『マルコヴィッチの穴』を想起させて不気味でありながらも楽しくもあります。女子寮のスマホを通したやり取りから永遠を感じさせる描写であったり、とにかく独特の作家性を感じました。

『たった一人の。』

今回の作品群の中で一番笑わせてもらいました。展開のスピードも全ての登場人物が障壁になっていく様子も実に面白く書かれていました。それだけに 28 ページ下段のト書きを目にした時のガッカリ感は半端なかったです。あー、なぜ夢オチにしてしまったのか？ まるで嘘のような、そして悪夢のような展開のまま突っ切って欲しかったと残念でなりません。こんなオモシロイ対話が続く作品はなかなか書けないと思っております。

以上、今回は僕にとっても非常に勉強になった選考会でした。